

# 思ひ草

第4号

平成23(2011)年3月1日 発行

## 「箱根駅伝 ～つながりの中で育つ～」

人間開発学部長 新富 康央



今年は、「箱根駅伝」で幕を開けました。最終10区でコースを間違え、本学初のシード権獲得の劇的ドラマをつくった寺田君は、本学部の1年生です。箱根路を2日間、往き来しました。誰もが他大学の選手にも声援を送りたくなる。そんな不思議な世界でした。子育てに関する貴重な示唆も得ました。

第一点は、「自分への自信」ということ。学生たちには「自信」、すなわち「自分を信じる」ことの重さについて語っていました。寺田君も、10区の走り、「自分を信じる」という言葉の意味を感じ取ってくれたことでしょう。

今日の子どもに欠けているものは、中央教育審議会答申の言う、「自分への自信」です。この欠如により、子どもたちは他者と関わることができないでいます。自分の「よさ」を認識していないため、他者に対して、どんなことで自分はアピールすればよいか、分からないのです。その結果、他と繋がること無く、自分の世界に閉じ籠ってしまいがちになります。「人

間関係構築力」が喫緊の課題とされていますが、その根底は「自分への自信」づくりのようです。

第二点は、仲間の持つ「チーム力」です。駅伝では「襷をつなぐ」ために、チームが一丸となって力走します。一人では弱くても、チーム力が一人一人の力を引き出してくれます。本学は初のシード権(10位内は来年も出場可能)を獲得しましたが、実は、区間一ケタの順位で走った選手は3名だけでした。

私は「骨太の学力」を提唱しています。「学力向上」の掛け声が、ともすれば個人競争のレースとなっています。しかし、子どもたちは一人一人では弱いのです。仲間に認められたい、支持されたい、先生からの信頼や期待を得たい。こうした気持ちから、彼らはつまずきから這い上がり、がんばろうとします。総じて、「つながりの中で、育つ」と、総括することができるでしょう。

## からだの芯から湧く「こえ」に・・・

教育実践総合センター 専門研究員 小笠原 優子



今年も節分が過ぎました。ここ数日間は、センターのカウンターに顔をのぞかせては、話しこんでいく学生たちがいます。学校での子どもとの出来事、風邪とインフルエンザ連続で体調を崩したこと、教職に向けての今後の進み方など、精神的余裕のある時期のためか、じっくり話していってくれます。うれしい学生たちの「こえ」です。

1年前の春、私は学生と何ができるのだろう、と自分に問いかけながらスタートを切りました。教育インターンシップで動き出した学生たちの「こえ」をたくさん集めよう、そして学校現場の「こえ」と合わせていこうと考えました。そして1年間、さまざまな「こえ」が伝わってきました。

まずは、学校現場に飛び込んだ頃の「こえ」です。「子どもたちをみていてくださいね、と学生さんに話したら、本当に1時間ずっと教室の後ろで見ていてくれました。」と、笑顔で校長先生は次のように。「子どもの姿を観察することと思っただけでしょうか。」・・・そこで、学生たちに聞くと、「初めての教室で何をしたいかわからない。子どもたちをみて、行動しなければと思うのですけど。」の「こえ」が返ってきました。大人になって初めての教室は子どもの頃いた教室とは別世界だった

のです。

そして、少し慣れた頃、周囲に認められた時の「こえ」です。「体験学習のとき僕の役割はなぜかたくさんなのです。大変だけど・・・。」彼は、先生方に頼りにされていると感じ、「頑張る」と決心を伝えにやってきました。人のために役立つこと、頼りにされることは、動き出すパワーを与えてくれたようです。そして、子どもの姿から学んだ「こえ」です。「ほんとに子どもっておもしろい。大人が考えないようなすごいことを嬉しそうに言うけれど、厳しいことも言いだす。子どもの知っている世界の中での判断なので、大人はそれをわかって見ていかなければいけないですね。」と、子どもがよく見えるようになりました。

そして、最近の「こえ」です。「見てください。こんなおみやげももらいました。」手には子どもたちからもらった手紙の束。「こんなにしてもらって、僕も手紙書きたいです。」子どもとかかわった時間の積み重ねがあるからこそ、嬉しさも増したようです。

1年間を振り返って、学生たちに「こえ」をかけるとすれば・・・「子どもたちの姿からつかんでいく感性や気づきを大切にしてほしい。そして、この経験を通して自分のからだの芯から湧いてくる『こえ』で動き出してほしい。」になります。

## 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。後期の活動を紹介します。

### 教育インターンシップ

学校現場での実習から多くのことを学びました。

「教職=このすばらしい仕事をもっともっと味わって欲しい」

～國學院大学STに感謝～ 山内小学校 校長 竹内 詩朗

本校では國學院大学からの学習支援の学生をスチューデントティーチャー(ST)と呼んでいる。子どもたちに先生と呼ばせたいからであり、学生にも教職の最前線にいるという自覚をもって欲しいからである。

一昨年より國學院大学と連携し、学生のボランティア活動がスタートした。多くの学生が賛同し、本校にも多くの大学1年生がやってきた。学生も学校も互いに初めてということもあり、戸惑いの多いスタートだった。入学したばかりの1年生である。服装や心構えからして、高校生？といってもよいくらいである。でも、心は教育に携わりたいというしっかり思いをもっている学生だった。また、受け入れる学校自体にサポートを受ける準備がなかった。これまで担任は、いつも一人でがんばってきた。紙を配るのも、給食を配るのも、掲示物を背面に貼るのも、常に一人で行ってきた。だから、サポートを受けることに慣れてなく、指示を出すゆとりさえなかった。

そんな訳で、始めは技術員さんの手伝いが多く、U字坑の砂とり、枯れ葉掃除、階段掃除などをやってもらった。クラスに入ってもただ後ろで立っていることが多かった。3限に間に合わないと言って、急いで校長室で給食を食べ大学へ行くことも多々あった。それでも楽しいと言って、また次週に来てくれた。

学生に常に話した。「学校でする仕事は全て教育活動であり、それらを知ることはとても大切である。」と。担任になってしまうとクラスのことだけに追われて、周りが何も見えなくなってしまう。廊下や階段がいつもきれいなこと、雑草が抜かれていること、ドアがスムーズに開く訳、給食がおいしい訳、業者の荷物が届いていること、いつでも印刷できること、トイレがいつもきれいなこと等々、知ることはきっと将来大きな教師を作ると確信している。

「100年の計は子どもを育てるにあり」、今、将来の日本を背負う教員を作らねばならない。どんな子どもに育てたいのか、今どんな力が不足し、どんな力をつける必要があるのか見極め、考え、トータル的に学校を見て、どんな学校にしたいのか考えられる、今でなく先を見られる教師を育てなければならない。

日本の財産は子どもたちであり、これからの日本を支えるのはこの子たちである。その子たちを安心して任せられる先生になって欲しい。そんな思いで学生たちのボランティアを歓迎している。

そして、私が今、学生ボランティアに一番に言うことは「子どもたちとうんと遊んで欲しい」ということである。子どもたちとの信頼関係を築くこともあるが、学生自身に教職の喜びをたくさん味わってもらいたいからである。「絶対に先生になりたい」と思う気持ちをもって欲しいからである。



### 「変化～子どもの成長と先生方の姿から」

初等教育学科 2年 渋谷 美佳

新石川小学校での1年間で一番心に残ったことは、子どもたちと信頼関係が築けたことである。最初は教えられることを嫌がっていた子やノートを隠していた子もいた。日が経つに伴い、進んで聞きに来る子も増えた。1年間でたくさん子どもたちに出会い、様々な場面に直面した。泣いている子、怒っている子、叱られてしょんぼりしている子、一つの課題に向き合って真剣な顔をしている子、その子たちを通して子どもへの理解が深まった。教師の仕事は、授業をすることだけではないということを身をもって感じた。6年生の授業で使う問題を作らせていただいたとき、全ての授業は、計画が大切であるということを学んだ。子ども同士がけんかをした時、子どもたちが納得するまで話し合わせている先生の姿を見て何よりも子どもたちのことを考えていると感じた。

私が感じた学校という場は、「変化」である。毎日が同じということはありません。子どもたちは日々成長している。私も同じように日々成長した。最初は大学生という立場で参加したインターンシップも今では子どもたちの成長を見に行くことが楽しみである。6年生の卒業も笑顔で送りたいと思う。

## 教育インターンシップ

### 子どもたちの姿から見えてきたことは…？

#### 「夢への第一歩」

初等教育学科 2年 北島 沙紀

新石川小学校では、私にほとんどの学年の子どもたちとふれ合う機会を与えてくださったため、多くのことを学びました。年齢が低い子どもたちは語彙数が少ないために自分たちの感情や想いを上手に伝えることができません。私たちが勝手な解釈をしてしまえば、子どもたちを簡単に傷つけてしまいます。そのため低学年であればある程、発言を慎重にとらえなければならぬということを学びました。また、子どもたちは私たちよりも狭い世界で生きています。自分の世界で作られた思考のみで物事を判断したり、発言したりします。悪い方向へ物事が進んでしまいそうな時は、新たな考え方に気付かせ、適切な判断へ子どもたちを導くことが教師の役割なのだと学びました。

私は、子どもたちとふれあうことが楽しみで仕方ありませんでした。運動会で踊るダンスで合格をもらう為に、汗をかきながら一生懸命練習する子、宿泊体験でシーツをたためないお友達に手を貸してあげる優しい子、「私ね、昨日小びと見たの!」と目をキラキラさせながら話しかけてきてくれる子、思いどおりにならず口をとがらせながらいじける子…。全ての子どもたちを愛おしいと感じました。私は小学校から帰ってくると、「なぜあの子はあの時にああいう発言をしたのだろう?」「なぜあの子はああいう行動をとったのか?」と子どもの気になる発言や行動について自分なりに分析をすることが楽しみとなっています。子どもを理解しようとする気持ちがなければ、適切な支援はできません。教師を目指す者として大切なことは、「子どもの世界へ飛び込もうとする心」ではないかと思えます。私は子どもがもっともっと大好きになりました。そして、教師になりたいという夢がますます大きくなりました。この経験を忘れずに夢の実現に向けて努力していきたいと思えます。

#### 「学生の立場から 先生という立場から」

健康体育学科 2年 小堀 航

特別支援という形で中学校にお世話になり、二人の生徒と向き合い、個別に学習支援を行った。初めに会った時は、どこか甘えている部分が見られ、個別に学習を行う形が日常のことになっていた。私は、この状態が気になっていて、二人の生徒には、別教室で勉強していることを当たり前と思ってほしくなかったし、中学3年というかけがえのない時間を教室のみならず過ごしてほしい、この先、大人になっていく中で仲間をもつことの大切さを教えたいと思っていた。実際のところ、それを自分自身がどのように伝えたらよいか、とても悩んだ。

私が教育インターンシップに来ている意味があるのかと思うこともあった。しかし、夏休み明けくらいから二人は進学について考え、少しずつ目標が持てるようになった。6月当初に比べると学力の成長も見られた。二人は真逆の性格であるが、お互いを認め合いその間には優しさがみられることもあった。自分が教師になるための勉強というより、生徒達のそのような成長がみられたことが何よりうれしかった。あと数カ月で卒業となるが、自分自身の経験をもとに、二人があまり感じる事ができなかった学校の楽しさや何年たっても中学校や高校の仲間は一生涯続く大切なものであることを伝えてあげたいと思う。そして新たな一歩を踏み出すときの勇気につながるようにと願っている。

教育インターンシップを通して少しばかり自分自身が成長したと思うし、貴重な経験になったと思う。大学内の授業にとどまらず現場に出て学んだことは本当に多かった。だからこそ、多くの学生に教育インターンシップを勧めたいと思う。

#### 教育インターンシップを通じて

健康体育学科 2年 伊藤 純一

私は、山内中学校で6月から特別支援学級の補助員としてお世話になっている。生徒は1年生が大半を占めており、この活動を始めた当初は、どこかまだあどけなさが感じられた。この学級では生徒の自主性を重んじ、先生方は必要以上に口を出したりはしない。教室には至る所に生徒達が描いた絵や作った作品を丁寧に展示してある。授業も生徒個々に合わせた場や指導が工夫されている。中でも週に2、3時間ある畑仕事の時間では、畑を耕すところから、苗の植えつけ、水やり、草とり、収穫までを生徒達が自ら行った。また、授業中にやるプリントはまず生徒自身がやり、分からなかったり間違っていたりしたところがあれば先生方はそこで助言する。こうした日常生活の中で、生徒達は、まるでスポンジのように様々なことを吸収し学んでいく。週に1度しか会わない私でも、場面場面で、「この子、以前と変わって、成長したな。」と感ぜられるようになった。

始めた頃は生徒とうまくコミュニケーションがとれず、どうしたらよいか考えたり、先生方にアドバイスをいただいたりしながら、試行錯誤の連続だった。ただ、生徒達の明るく素直で元気な性格に助けられ、慣れていくことができた。こうやって実際の教育現場を肌で感じ、多くのことを目で見て、生徒と接しながら行動し学べた。この経験で、教師を目指す私にとってはプラス以上のものを得られた気がする。私は、来年度もアシスタントティーチャーとしてこの活動を継続していくつもりだ。

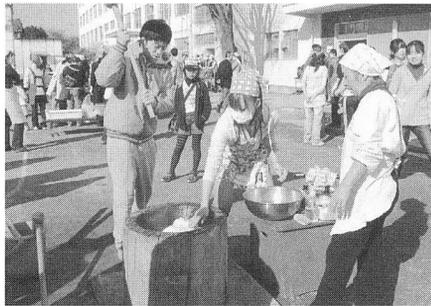
## 教育ボランティア活動

1年生も参加しました。冬の活動風景です。

### 餅つき大会

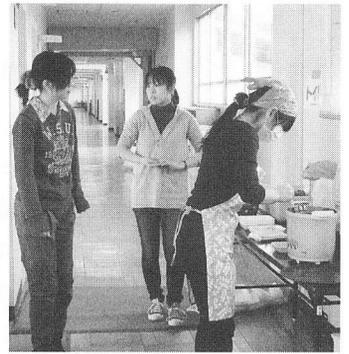
初等教育学科 2年 太田 愛子

12月18日、1、2年生18名で元石川小学校の餅つき大会に参加しました。私は、インターンシップでお世話になっている学校なので慣れていますが、1年生は少し緊張しているように見えました。普段あまり訪れることのない小学校の様子を見ることができたのは、よい経験だったのでは



ないかと思いません。お手伝いは、主にお餅や豚汁を配ったり子どもたちの相手をしたりと特に午後は忙しく、とてもやりがい

がありました。私もPTAの方々に出すお餅や豚汁を準備したりお茶くみをしたり子どもたちの列を整備するなど、たくさんお仕事をもらうことができたので、楽しかったです。お昼には、私たちもおいしいお餅と豚汁を頂きました。列に並ぶ子どもたちはとても元気で楽しそうで、一緒にいるだけで、元気になりました。また、先生方の仕事の大変さも見ることができ、学校行事が成功するには様々な計画や準備が必要なのだと実感しました。お餅や豚汁は予定よりもずいぶん早くなくなり大盛況で終わりました。帰りにはお土産のお餅も頂き、お手伝いを通して楽しい体験をすることができ、よかったです。



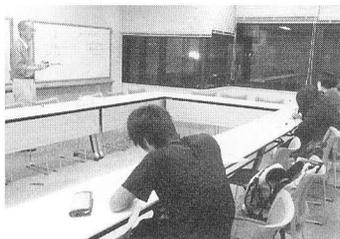
## 教師力形成サポート「未来塾」

後期「未来塾」での状況をお知らせします。

### 「数学の基礎を確認する」

初等教育学科 教授 柴崎 和夫

「数学の基礎を確認する」と銘打ったが、今回の未来塾は数学の講義を意図しているわけではない。高校までに学んだ数学がどんなものだったかを再確認して貰い、頭の体操をしてもらう場を提供しているつもりである。大学を卒業してどんな道に進もうとも、現実問題として、入り口の段階で一定程度の数学(推理)能力を要求されるからである。要求される水準は、高校で全員が学んだ数学I程度までで、実際にはもう少しやさしい。けれども、数学に苦手意識がある学生では、結構これが難しく感じる。そのような苦手意識を少しでも減らし、また就活間際になってあわてないよう、現段階での実力を再確認してもらいたいからである。また、数学という科目は単なる暗記科目ではなく、ものを考えるのに筋道たてて考える訓練に役立つと考えるからである。そのために、単に問題(教職採用試験程度)を解くだけでなく、解くまでのステップ



を他人に説明し、納得してもらい演習形式をとった。参加してくれた学生が少しは楽しんでいる風情なので、最低限の目標は達成していると考えている。

### 「剣道昇段級審査対策(実技・形)」講座のようす

講師 植原 吉朗 教授



植原吉朗先生の指導のもと、6回の講座が行われました。日本剣道形の演武の総仕上げをしているところです。